

麻生路郎編著
柴谷柴舟漫畫

川柳漫畫

累卵の遊び

不朽洞版



序
其の壹

よ友柳

一本の燐寸が
燃えつくすまでに
寒さや 空腹が
せまつて来る迄に
わたしたちは
一句を遺しておかねばならぬ

序 其の貳

(一)川柳の妙味を、骨を折らずに味つて貰ふつもりで、嚙んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」である。

喰べて味がわるければ、それは私の料理が拙いので、即ち嚙み方や碎き方が足りないので川柳の罪ではない。

(二)「川柳雑誌」では幸ひにして好評だつた。そこで、もつと世の中の多くの人達にも味つてもらいたいと思つて單行本にする慾を出したのである。このころは宗教をひろめるころも少しもかはりはないのである。お金が儲けたいなごさいふ、そんな大それた考へからでは毫頭ない。今の言葉で言へば川柳社會進出の一助ぎしたいためにである。

(三)作品はすべて「川柳雑誌」から抜いた。類題にしてある句の多くは雑詠から

採つたものである。畫漫になつてゐる句、句評、漫畫なきに關聯して句を味ふ時、一層興趣が深からうと思つて、類題別にしたのである。

(四)類題句の中からその一句を選んで漫畫にしたのではない。漫畫になつた句に因みある句を拾ひ蒐めて類題句としたのである。従つて畫になつた句と、ならぬ句との間に巧拙の差を意味してゐるものではない。つまり「累卵の遊び」は「川柳雜誌」に連載したものに、新に句を蒐めてなつたものである。作家は全國に及んでゐる。

(五)「累卵の遊び」の外に「日月は輝く」も「大衆と共に」を加えた。

(六)漫畫に、装幀に、相變らず柴舟兄に片棒を擔いでもらつた。僕が生きてゐる間は君をなやますことだらうと思ふ。感謝の外ない。

昭和三年三月

路 郎 識

(一) 累卵の遊び

玩具屋の	二柳子(一)	夕	諸家(三)
玩具	諸家(四)	手	諸家(三)
人前は	柳秀(六)	おごつたか	かほる(三四)
初戀	諸家(八)	カフエー	かほる(六)
酒の粕でも	諸家(八)	女給	諸家(六)
夫婦	飯山(三)	酒	諸家(七)
羊羹の	路郎(六)	松竹へ	花童子(六)
老夫婦	諸家(一四)	映畫	諸家(三)
年寄	諸家(一八)	芝居	諸家(三)
菓子	諸家(一九)	少女	諸家(三)
夕闇は	天花(三)	嫁の愚痴	美の作(三)
瓜	諸家(三)	和尙	諸家(三四)
		姑	諸家(三)
		窮屈な	凡平(三)
		恩人	諸家(三)

末の子を……………	助六(四〇)	船……………	諸家(五)
末の子……………	諸家(四三)	手を逃けた……………	案山子(六)
晩酌……………	諸家(四三)	薬……………	諸家(三)
蠅だけの……………	隨帖(四)	子ぎも……………	諸家(三)
蠅……………	諸家(六)	行商の……………	眠聲(六)
部屋……………	諸家(七)	商人……………	諸家(六)
おそろしい……………	柳路(四八)	行商……………	諸家(六)
悟氣……………	諸家(五〇)	出産……………	諸家(九)
夢……………	諸家(五〇)	産後……………	諸家(七)
大阪は……………	かほる(五三)	男の子……………	諸家(七)
大阪……………	諸家(五)	女の子……………	諸家(七)
自動車……………	諸家(五)	惚れられて……………	朝陽(三)
書置の……………	露斗(六)	占ひ……………	諸家(四)
書置……………	諸家(六)	辻占……………	諸家(七)
船長……………	放馬(六)	自惚れ……………	諸家(七)

夕刊へ……………	吟女(七)	料理屋……………	二柳子(九)
夕刊……………	諸家(七)	記者の眼に……………	萬よし(一〇)
死……………	諸家(九)	記者……………	諸家(一〇)
朝戻り……………	翠峯(八)	會社……………	諸家(一〇)
父……………	諸家(八)	かさがされたさは……………	松郎(一四)
朝歸り……………	諸家(八)	變人……………	諸家(一四)
母に似た……………	三笑(八)	名人……………	諸家(一六)
母……………	諸家(八)	その罪な……………	無心(一八)
罪の子……………	諸家(八)	舞臺……………	諸家(二〇)
嬉れしさの……………	馬行(八)	妾……………	諸家(二二)
青春……………	諸家(九)	愛の巢を……………	志郎(二三)
坊子持さりこは……………	塊佛(九)	二階……………	諸家(二四)
坊主持……………	諸家(九)	若い燕……………	諸家(二五)
いもほうを……………	一徹(九)	愛の巢……………	諸家(二五)
京都……………	諸家(九)	をなご湯で……………	柴舟(二六)

女湯	諸家(二八)	海岸	諸家(三三)
風呂	諸家(二九)	(二) 日月は輝く	
おい君	春三(三〇)	光	諸家(三六)
帯	諸家(三一)	戀	諸家(三九)
友達	諸家(三二)	夏休み	諸家(四一)
さうぞお取り下さい	豆蔓(三四)	松の内	諸家(四三)
店	諸家(三五)	(三) 大衆と共に	
新店	諸家(三六)	塵埃	諸家(四六)
軒店	諸家(三七)	二次會	諸家(四八)
店先	諸家(三七)	失業	諸家(五一)
尺持つて	光路(三八)	聲	諸家(五四)
物尺	諸家(三九)	禁酒	諸家(五七)
暮らし向き	諸家(四〇)	探偵	諸家(五八)
徒らな	町二(四二)	窮屈	諸家(五九)
蟹	諸家(四三)		

川柳
漫畫
累卵の遊び

漫評
漫畫

柴路

舟郎

玩具屋の虎だけ首を振つてゐる 二柳子

観^{かん}じ來^きれば人生^{じんせい}は玩具屋^{おもちゃや}の虎^この如^{ごと}し。おのれ一人^{ひとり}、得^え々^々こし
て首^{くび}を打^うち振^ふればさて何^{なに}かせん。そは累卵^{るいらん}の遊^{あそ}びに過^すぎず達^{たち}
観^{かん}せよ。超^{てう}越^{こつ}せよ。



玩具

竹獨樂の音も春らし天王寺	其象
ゼンマイの汽車母親の膝へ着き	不二綱
水からくりキツスされたり振られたり	かほる
玩具箱たうく寝たで片附ける	錦山
庖丁の玩具は凹むものなりき	久流美
失つた匙が出て来る玩具箱	峯月
守をする方が玩具をこわすなり	舟帆
自慢するやうに玩具の箱を出し	三雷波

洗はせる子供玩具を持ちかへる
水 火

投げられた程にキュービー傷がなし
輝 翠

子をすかすために電車よ犬の子よ
春 三

買つて来た太鼓立關から叩き
八郎兵衛

一人子のみんな玩具も淋しくて
路 郎

人前は相思と見ぬぬお辭儀をし

柳 秀

つらく考ふるに戀愛は風の如し。寸隙に往來し。瞬間的に生く。階級を超越しては烈風となり、時に涙の雨となる。又華やかなるこそ太陽に輝く向日葵の如く、儂きこそ夕を待たぬ朝顔の如し。無常迅速南無戀愛。穴賢々々。



初戀

初戀の河をはさんで淋しがり
悠々

初戀は日傘をさした其姿
青影子

つきつめた處女の情のものになり
莢豆

初戀のただ一心に紅をつけ
眠聲

初戀の思ひ出になる夏みかん
路郎

戀

越えられぬ溝を人妻知つてゐて
春三

身一つを任せば男白々し	同
逢ふてやつて下さい坊や歩きます	石竹
泣いてるましたが思ひ切るでしよか	同
プラトニツクラヅミ號すや片思ひ	町二
嬉曳や葡萄色なる闇もよし	同
いつ來てもおんなじ着物きてる戀	日車
人知れず覗く寫真となりにけり	蘆穂
振向けば君も小さい並木路	葎乃
不足斗り人に云うて、深うなり	萬よし
戀人を逃すまいとて嘘をつく	一文字

あな儂な來たのはほんの夢にだけ	媾曳の傘一本に雨もよし	別れる迄こゝに鏡があつた部屋	惚れられた頃を師匠は思ひ出し	賽錢の中には戀の音も立て	一直線に十六の戀	たまに逢へばごうしませうを連發し	戀人に見せる髪ミは知らず結び	この雨が銀絲に見える姉の戀	戀なのか知ら見送りもしてみたく
鶴美	鮎美	山雨樓	聞路	光路	天花	柴舟	櫻ン坊	眠聲	柳秀

芝生の戀よやはらかに晴れてゐる	鎌	月
或村のかたほさりなる戀にして	露	斗
ひばり鳴いたまてまぎれましょかね赤椿	莢	豆
冷たい手そんな心かこ云はれてる	多	喜女
ひやかせぎ外に女のない如く	志	郎
慰める姉藝者にもおほねあり	冷	笑
戀しさは風にも聞いて見たうなり	白	蝶
戀の疲れズボンを敷いて寝る	刀	三
思はじとするには金がありあまり	路	郎

酒の粕でも焼かうかご夫婦きり

飯山

「おい」を呼び「はい」を答へて暮すこと、茲に歳あり。

甘き唾きにもいさゝか食傷氣味となり、生活の淡きこと平々
坦々たる道を行くが如し。夕刊を讀破し「文藝春秋」を飛び
くに讀む。これ晨に帽子をいたゞいて出で、夕に靴を脱し
て疊の上の人となる所謂月給人種の夜の情景ならずや。あゝ
人世の退窟漸くにして迫り來りたるが如し。



夫 婦

障子張るこきを夫婦で譲りあひ	路郎
もう叱るばかりの宅と思つて居	同
狭氣を出すミ女房に叱られる	零骨
名ばかりの夫婦でしたミ里の母	北公
若夫婦工場に近い家を借り	叟峰仙
飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ	葭乃
遊ばしておいて夫婦は腰をかけ	琴月
物干で亭主のもどるのをみつけ	助六

不似合な夫婦妾にして仕舞	のほろ	啞人
しまつする事に夫婦の氣が合うて	舟々	
のぞきもう夫婦の聲になつてゐる	毒仙	
夫婦愛雜誌の頁からも湧き	三巴	
鮮人の夫婦脊の君厚司着て	光哉	
白蓮へ夫婦の批評かけ離れ		

羊羹のここでもめてる老夫婦

路郎

世のありまあらゆるものは墳墓へこいそぐ。

「おい」が聴ては「お婆さんや」こなり、「ねね貴郎」がいつか「お爺さんや」こなる。總入齒の老夫婦に戀愛は最早ゴムを噛むにも等しく、甘きものさし云へば羊羹にカステラに外ならず。

羊羹のすこしかたいも舊家らし

もう叱るばかりの宅さ思つて居

なごの句噛みしめて見ても面白からんか。



老夫婦

利子だけでも費ひきれない老夫婦
恥かしい事もあつたさ老夫婦
老夫婦浮世離れて芝居を見

飯山
炭車
秀甫

年寄

年寄は手数のかゝるつりをこり
年寄は離れへ逃けるやうに行き
老人の逆様事にまた出合ひ

水府
琴月
萬よし

古い値をいふて年寄値切るなり

路 郎

菓 子

辻占が出さうに思ふもなか也

かほる

見本ほぎ一文菓子屋賣れ残り

同

よく賣れて涼しさうなる信樂屋

同

巴燒五十錢がにうろたへる

同

菓子鉢の蠅を追はれて恐れ入り

乾 坤

雛菓子さいふを親爺も摘まんで見

英治郎

羊羹のすこしかたいも舊家らし

路 郎

夕闇は胡瓜を刻む手に迫り

天花

夕闇は美し。すべてのものを美化す。胡瓜を刻む音さへほがらかに、ザツク、ザツク、ザツク、ザツク、ザツク。聴て郎君御歸館あるべし。型の如く接吻する。一時間後、ピアノ鳴り響く。

婦人雜誌賞讃の腕前なり。郎君謹聴す。暫くは家庭圓滿なり



瓜

暑くとも女房の瓜のもみかけん

光路

受合ふさ云つた西瓜に腹が立ち

粹浪人

風ほめて居るへ西瓜を切つてくれ

助六

まだ畑瓜や茄子を作つて居

路郎

夕闇

黄昏に冬の子一人ねぎを下け

眼隠子

夕焼は暮るゝに未練ある如し

助六

感激を仲仕薄暮の中に知る
暮れるづよそくしくなれり藤の花

刀三
莢豆

手

手をつなぐ廣さに櫻咲きみだれ
挨拶の我手に指輪なかりけり
定命ささていふものの手の細き
れんげ草寝ころんだまま手を伸ばし
手のひらへ載せて貰へるだけの事
手の卑下をして相性を見て貰ひ

文久
東洋鬼
十字路
逸錢
雅幽
かほる

おごつたかおごられたのか笑つて出　吐露樓

金が敵かたみといふことあり。その敵かたみに巡めぐり逢あひたしみて齟齬そごする人あり、齟齬そごせぬ人あり。友情ゆうじやうは常つねにその埒外らちがいにあり。AよりBにBよりCに轉々たんとくして大おほいに吞のむあり、吞のまぬあり。圓えんタシそのために生うれたるや否いなやは知しらず。浮世うきよは面おも白しろし。



カフェー

安カフェーあんな所に筈見え

かほる

女給

ストーヴへ女給の方が足をあけ

史風

真剣な話を女給笑ふ也

椿薫

五圓札女給のものとなつただけ

山雨樓

することがないので女給枯すゝき

一洲

兩替にいつて女給は暇がいり

柳路

酒

吞ます氣でゐるに資本家ののしられ

路 郎

さて呑むきなれば資本家先に酔ひ

同

半分は呑みしろにして嘘を云ひ

花童子

ある上につがれて下戸は恐れ入り

放 馬

約束をあぶながられる程に呑み

霞 乃

電話からサツバリ酔はぬ酒になり

史 風

やけ酒の呑めるかるさに候はず

莢 豆

酒に呑まれるなき嘘を思へり

刀 三

松竹へ這入つて母へ楯をつき

花童子

一少女あり。生れながらの不良にはあらず。松竹に入る。

映畫劇志願たるやいふまでもなし。いつの間にやらモダンガ

ールの風髓を會得し、男を男と思はず、母を母と思はず――

母の嘆聲天の川のごまく長くし下儂なし。



映 畫

いざ参るぞミ阪妻は斬りはじめ

柳 路

ヘヤネットはつきり見ゆる大寫し

同

五右衛門に犬が驚くロケーション

町 二

書置ミなつてスクリーン變るなり

舟 々

芝 居

盗まれてゐるとは知らず芝居にゐ

琴 人

腹切りの樂屋へ大使握手に來

東 魚

幕が開いても幕が下りてもコンパクト

柴舟

一刀のもこに斬られて役はすみ

光哉

氣にかゝる事を芝居で見戻り

靜流坊

光秀が小さう見ゆる半廻し

かほる

定宿で芝居の留守を頼まれる

陽春

花道へかかれば二階首が伸び

映紫朗

少女

英ネルを着る少女の脊が高し

刀三

歌劇志願お嫁なんかに行かない氣

路郎

嫁の愚痴和尚からく笑ひのけ 美の作

嫁の愚痴、これ一種の日課なり。和尚の胸中を按ずるに「然らず」い言へば逆鱗に觸るゝこゝ火を睹るよりも燎かなり。

さればとて「左様々々」ミ一から十まで肯定することは思ひもよらず。呵々大笑して、その一言に同じたるが如く同ぜざが如き一策、和尚たる又難いかな。



和尚

坊さんの脂ぎつたは疑はれ
名僧の今日も粗末な膳につき
咳拂ひしても名僧有難し
石疊今度の和尚きれいずき
本堂で和尚和尚の聲になり

毒仙
佳山
聞路
五葉
路郎

姑

見付からぬ針姑に拾はれる
稍露

人形になつてゐるとは嫁へ無理	嫁が来てからの不吉のやうに云ひ	姑ご二度目の嫁ごうまがあひ	空瓶を賣るへ姑口を出し	あれほどの姑の型に嫁がなり	姑も嫁も好きなりはぢき豆	姑の落度へ嫁は振返り	譽められた嫁の不足を言ひかねる
路郎	毒仙	嶺月	柳路	天溪	かほる	番翁	助六

窮屈な部屋に恩人老い給ふ 凡平

恩人零落す。清廉なるが故也。潔白なるが故也。圓い卵子も切りよで四角いふこを知らざるが故なり。人の苦患を黙視するに忍びず、之を援けんとして反つて溺るゝが故也。水清ければ魚棲まざるの譬に洩れず、恩人遂に陋屋に躡る。寂しき世なるかな。



恩 人

風の如く恩人はもう辻を折れ 悠々

恩人の息子を置いてある二階 飯山

恩人へせめて御繩を頂戴し 案山子

一斤の砂糖に恩を忘れざる 松郎

恩人を忘れる程の運が向き 紫明

恩人は遊んで飯を食ふてる 春莊

恩人は昔のままのなりで逢ひ 波郎

恩人さ来た圓山はこのあたり 一路

恩人へ出す座蒲團は盛り上り	啄舟
恩人にそむいて路次に二人住み	三巴
恩人はまさかの時の金を呉れ	刀三
恩人さ笑ひの中でくみかはし	太平樂
恩人に見忘れられた面白さ	塊人
恩人へ今の身分を詫びてゐる	憲翠
恩人に繁昌ぶりを見て貰ひ	馬行
ちよいくさ来て恩人に喜ばれ	雅幽
恩人であつたさ思ふ四十過ぎ	路郎

末の子をあぐらの中へ入れて呑み

助 六

愛は盲目なるがよし。晩酌は陶然たるに盡く。

眼の中に入れても痛くない末ツ子をあぐらの中に入れてお父さんの上機嫌や思ふべし。

「お父さん云つて御覽、お父さん云つて御覽」
「ミ愚にかへる。又よろしきかな。」



末の子

見付けたを末の子ひきく嬉しがり
山雨樓

末の子のいゝこばかり眼について
松 郎

末の子はついでに出来たこごにされ
翠 峯

末の子は貴公子のする戀をする
無 限

末の子が泣くさみんなが叱られる
聞 路

復習は末の子が来て場所を變へ
源 坊

末の子を負うて面會暗く來る
鳴穂堂

末の子を可愛がるやら泣かすやら
新 水

晩酌

獨酌で添乳の妻ミ話し合ひ

芳香子

晩酌に丁稚時代の話も出

源坊

出来過ぎたお爛に短氣あらはれる

かほる

晩酌をやめて淋しい箸をこり

美濃守

こほろぎに誘はれて行く酒の味

莢豆

蠅だけの部屋に樂しげなる蠅よ 隨帖

蠅曰く「人間は遂に我等を容るゝ雅量を有せず。人間は憐
忍にして冷酷なり。某蠅も某蠅も人間に對し何等の危害を加
わざりしに、その命を斷たれたり。釋尊の慈悲、キリストの愛
そは人間の玩具に過ぎず。今人間は眠る。我等の世界なり。
人間のための珍珠佳肴は期せずして我等のための珍珠佳肴
なる。憐れむべきは人間なるかな。」



蠅

ビルディング 蠅 迷ひけり 迷ひけり	文 久
雨の晝 夫婦の外に 蠅が ぐる	松 郎
神経の 尖つた やうな 蠅 一つ	露 斗
不精者 蠅は そんなに 怖くなし	太 公 坊
神様を 怖れぬ ものに 蠅 一つ	鮎 美
故郷は 蠅 ついて 来る ついて 来る	一 徹
安静を 破らん ぎする 蠅 もる	桃 哉
ひる日 なか 蠅 ざる 用がある ばかり	路 郎

部屋

バクテリア博士の部屋で年を越し	馬行
久し振り生洲の見える部屋で呑み	かほる
二日酔して庖丁の見える部屋	刀三
父の部屋子供心にかしこまり	松郎
散髪屋鏡の裏は只の部屋	柳一路
貧しさはちやぶ臺丈が部屋をしめ	古岐柳

おそろしい愒氣であつた夢がさめ 柳 路

悪夢醒む。汗一斗の觀あり。我が家の襖忽ちにして眼に入る。これ第一の安心なり。さても怖るべきは女の執念なり。かゝる時に男は、これからは、決してなごゝ思ふが常なり。されどその心を忘るゝ事も又速かなり。そは齒痛が止んで醫師を忘るゝにも似たり。



惔 氣

惔氣きころか健康を案じ 松 郎

まあ茶でもお入れ惔氣もいゝけれぎ 同

お惔氣へ下女ちんまりミ手を重ね 飯 山

たま〜に出るに疑持つ夫 志 郎

頬紅のあかし夫は惔氣をし 眠 聲

夢

落葉搔いて夢の黄金を思ひ出し 柴 舟

一富士も二鷹も見たに此の晦日	夢であれ母の若さが眼にあまり	殺された夢から深くなつてゆき	親切にされてはるない夢を見る	初夢に銀行の壁かたい事	さか夢にしても氣になる内の人	明け方の夢を氣にせず肥えてゐる
徹底郎	刀三	松郎	莢豆	朝陽	眠聲	霞乃

大阪は轢れかけても好い所　かほる

大阪の圓タク地獄も考へやうによれば、二百十八萬分の
一人が轢き付さるゝなり。さ思へばこそ涼しき顔してゐらる
也。なかくによき度胸なり。あゝ歡樂は渦巻きぬ。



大 阪

大阪の夜を知つてゐる無一文 馬 行

大阪に住んで揉手の癖がつき 同

大阪の大きさ半^ゑり屋でも喰へ 美髯公

大阪を立退き際の岩おこし 毒 仙

大阪に馴れて夜店へしやがんでる 大夢子

大阪でだまされたのも修業や 山雨樓

店は大坂にあり茄子の花 閑 路

戎橋見込むだやうにピラをくれ 花 城

自動車

自動車に乗るステッキを仲居持ち	自動車に止まつたミコは美容院
塊佛	駒人
	萬よし
	松郎
	春三
	輝翠
	山雨樓
	三笑

書置の船長様ご書き終り 露斗

淡路島見ゆ。佳人死の平靜に歸らんす。われはこゝめじ
死にたい人は大いに死なさせてやるべきなり。死にたくも
死に得ざる人々のあまりに多きこゝのおかしければ。

芥川の遺書に曰く。生かすて夫は絶對に無用なり。眷々
服膺すべきなり。



書置

書置に義兄の耻が書いて無し 紋太

書置にもう損を云ふ屋形なり 萬登

書置さ知らずに車夫は頼まれる 彩秋

啄木に泣いてるたのも遺書のうち 手腕坊

書置にふられた事は書いてなし 静雲

置手紙すぐ死ぬもののやうにかき 三四四

妻子よさらばおもむろに死を選び 嶺月

書置に先を急ぐも哀れなり 路郎

船長

船長の宅船長の額をかけ
放馬

船

許嫁タイプを離す氣になれず
柳秀

曳船が神戸素通りしてるやう
二柳子

船ミ船さはくくミスれちがひ
飯山

出帆に三方の山響き合ひ
雅幽

いつ出たかももう船の無い朝となり
吐露樓

手を逃げた六神丸を子に頼み

案山子

ただ頼め花もはらくあの通りこ一茶は他力本願也。老て
は子に従ふべき也。ただ頼むべきなり。豈手を逃けた六神丸
のみならんや。



藥

藥局できつときくのを貰ふて來	亂
寢間着着て私も貰ふ風藥	聞路
一服の藥ものぞみもつて飲み	月仙
オブラート破れたミ云ふ眼つき也	柳路
この色の藥を母も服んで死に	徹底郎
藥瓶色が變つて二日分	一狂
畏れ多い紙面の裏は風藥	萬よし
風邪藥明日も働く身體なり	紋太

子ごも

よしき云へば脱兎の如く駆ける子よ

白蝶

ヂヤンケンホイアイコで柿の大さ小

同

儲かつてるるのへ子供飯を急ぎ

二南

其の次は象の聲か子へ困り

光路

双六へ這うて來られて母を呼び

蝶二

脊の子が引いても鳴子音を立て

輝翠

自轉車に轆かれかかつた子を叱り

三笑

氣のひけるものを干してゐる子澤山

零骨

子の下駄がみんなちらばるすこやかさ	にらみ鯛へ子供は又も叱られる	係員以外課長の子供がる	うちの子に限つてさいふ顔になり	先生へ手をあける兒の腰がうき	迷ひ兒が雀の卵見せてくれ	耳はぎこおててはぎこミ子に甘し	買物を待つ子は椅子へ淺くかけ	ビロードの襟からおけしだけが見ぬ
其象	朝陽	鎌月	飯山	濁水	省二	笑人	雅芳	助六

きれいすき子供の味を知らずして	眠
親ほごに階級のなゐ社宅の兒	高
鯛の鯛子供御飯を忘れてる	流
氷饅頭一人が買へばみんな買ひ	ひろし
こま廻すやうに倅を皆つかひ	雅
珍客へ子供間もなく抱かれて居	萬よし
貧乏の子は秀吉をなつかしみ	三日坊
蟬捕つた一人へみんなついて行き	大夢子

行商の留守へ男の子が生れ
眠 聲

柳樹の初篇に

乳の黒み夫に見せて旅立たせ

の句あり。行商人の妻も又然せしや否や。



商人

商人は前の値段に恐れ入り	助六
商賣の可愛さここは負けて置き	さゝ舟
いそがしい中に商人悔みに出	飯山
臍くりの分を呉服屋心得て	馬行
商用で抜ける新地のさんざめき	白蝶
要するにあいつ商賣人なのさ	盗泉
値切られて丁稚帳場を振り返り	無心
怒つてる程に商人氣にかけず	舟々

行 商

物賣は障子もあけず断られ
さちらでもきくやうにいふ藥賣
押賣にうかゝ荷物擴けられ
腹の子の名前を決めて富山を出
顔まけがして行商は路次を出る

山 月
柳 秀
舟 々
柳 水
飯 山

出 産

次ぎくゝに産んで衣裳の持ち腐り

志 郎

初産に手酌見かねた里の母
三笑
内縁の幸か不幸か子は流れ
かほろ
裏切つた女よ人の子を生め
刀三

産 後

お産からずるくに居る里の母
柳秀
産後から亭主も一人抱いて寝る
村匂茂

男の子

閉めた戸が四五寸戻る男の子
櫻ン坊

五月晴もつゝ土堀れ男の子
石段をむかへに降りる男の子
男の子もう膏藥を剝いで見せ
三人の親でぎの子も男の子

眠聲
しける
二南
千代二

女の子

白酒へきつちり坐る女の子
女の子よくも話のつきぬこ
行水のそこを閉めてと女の子
女の子薬の瓶に花をさし

柳路
蒼梧樓
石竹
壽磨

惚れられてゐるに辻占凶と出る 朝陽

女をなに惚ほれられてゐると思おもふ時、既すでに女をなに惚ほれてゐるの
也なり。迷まよへる羊ひつじ也なり。辻占つじしらいかに賢明けんめいなり、雖いなも又救またすくふべからざ
る也なり。聽きて帳簿さつぽを胡魔化こまけす算段さんだんに耽たふるが必定ひつてい也なり。あゝ慎つしむべ
きは色いろにありなき、哲人てつじんぶるころには立派りつぱに手遅ておそれなり。



占ひ

占ひに少し望のある體

口紅

圖星さされて氣味悪い易

京郎

父と母と僕とみくじがみなちがひ

眼隠子

辻占

辻占はしばしその戀まである

花城

辻占にまでも女難がつきまごひ

放馬

引き裂いて見ても辻占氣にかかり

志貴南

辻占の諦めよこは何事ぞ 鮎美
辻占に今の心を見破られ 閉路
辻占の通りに女氣が動き 刀四郎
辻占を買ふこは俺も迷ひしか 眠聲
辻占賣聞けば四谷ミだけ答へ 愛波

自惚れ

あの場合すけなくしたも女氣か 眠聲
自惚れの甚だしきは涕をかみ 刀三
自惚れは又東京へ行くといふ 舟々

夕刊へまあ死にはつたのご覗き

吟 女

儂^{はな}なし。儂^{はな}なし。彼^{かれ}、夕刊^{ゆふかん}の數行^{すうぎょう}を埋^{うづ}めて今^{いま}や亡^{なし}矣。

「まあ死^しにはつたの」こいふてくれる佳人^{かじん}、必ず^{かならず}しも泣^ないて
くれる人^{ひと}には非^{あら}ず。



早女書

夕刊

夕刊屋傘から傘へ一つ賣り 秀哉

夕刊は奥へ素通りして仕舞 東城子

夕刊を買ふにいつもの盲るす 世間亭

死

地獄へ行くならむ死にたくはなし 刀三

黻を笑へり四十位で死にたし 同

死ぬ言へば僕は死ぬ戀なり 同

失戀のまきに死ねまの緋しごきか 白蝶

死んだ方が樂ですといふ愚痴になり	菊之介
同病で死んだ話を寒く聞き	杏三
結局は死んだらお氣に召すだらう	志貴南
貰ふても淋しきものは御靈前	飯山
絶壁を死んだ話をして通り	ゆすらん坊
死ぬるのもいそがしいなあ爪を切らうか	大喪子
うちさけぬままに末期の水になり	春三
孫ひまご集めて何も言はず死に	雅幽
叱るではなかつた死ぬる子であれば	赤門

朝戻り父は叱ると思ひきや

翠峯

一人の父がありけり。

「若い時は二度もあるなし」

「悟れるか、否やは知らざれども顔をそむけて、朝戻りの子を二階に駈けあがらしむ。『止めて止まらぬ色の道か』とつぶやけるのみ。」



父

失職をしてから父の聲でなし
路 郎

晝の風呂泳ぐ氣にさへなる父よ
同

子煩惱がつたんがつたんしてくらし
同

裏へ來いソラ無花果をきつてやろ
同

ある時は子をだんばしでくひとめる
同

俺に似よ俺に似るなミ子を思ひ
同

ポーナスで父の腕前疑ふな
同

箸紙を父落ちついて書いてやる
同

木綿着でおごそかな父さなりおほせ

同

父親に詰手の本を頼まれる

同

一生を最敬禮で果てし父

町二

嫁の肩持つて父親叱られる

東北

入口が開いたら父さ思つて居

松郎

道樂に飽いて子供を可愛がり

大夢子

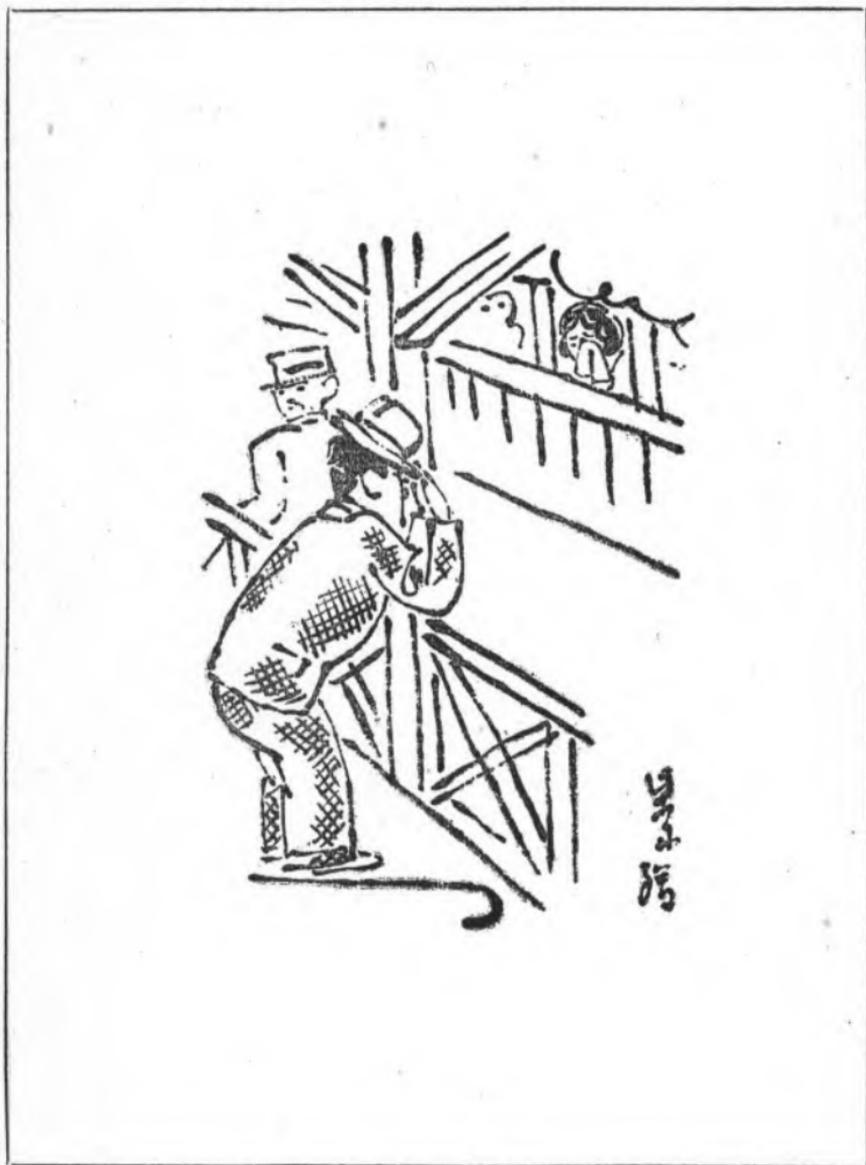
朝 歸 り

朝歸りかまぎの煙りもたいなし

飯山

母に似た顔で生れよ罪の子よ 三 笑

女まなならでは夜よの明けぬ國くにに、罪つみの子こが陸續りりぞくと生れたりきて
敢あへて不思議ふしぎでもなんでもなし。母ははに似た顔かほで生れんか、天下てんか
は泰平たいへいなり。西哲言さいてつげんはずや。確たしかに母ははの子こなれども、必ずかならずその
父ちちの子こなりとは斷言だんげんしがたしむ。



母

時々の駄賃に母の世辭を聞き	零
骨	
ほろく／＼して小兒科の扉をあけ	同
我母の一生を風の音がする	莢豆
よき人ごのみきく母のしたはしく	羊司
先生の言葉を母は信じすき	小蓬
そんならご母はへそくり出すならん	翠峰
この母の子か貧相な顔ばかり	駒人
母一人まだ居残りを待つて呉れ	眠聲

連れて来て母もついでに顔を剃り
白菊

母の字は小遣帳に見るばかり
聞路

信心か知らねど母の出がちなり
三笑

お前お前とよく喋舌る母
松郎

儲かるミ云ふは母への手紙だけ
彩秋

母はまた隣の鍵をこまづかり
路郎

罪の子

母の手で淋しく罪の子が育ち
乾坤

罪の子をあやしてくれる故郷の父
静雲

嬉れしさの三丁程も續きけり 馬行

青春は接吻なり。抱擁なり。カルピス也。魂の跳躍のすべ也。若き男ありけり。ひこり歩めご微笑なかくに盡きず、狂せるにはあらず也。彼の女を空氣中に感ずるが故なり。嬉しさの極みならずや。愛は強くステッキは輕し。



青 春

敷布は白く十七の秋 松郎

彼女彼女と書いて疲れぬ 同

太陽はなやみをみんな捨てさいふ 刀三

妻を貰へば洋酒そろへん 同

青春を黒い袴ですごして來 多喜女

エゴイストかなはねばもう死ぬる氣の 同

そんなものだこは若く見られてる 志郎

十八九大阪の夢 京の夢 天花

坊主持さりこは知らずやつて來る

塊 佛

坊主持、坊主の知つたことにはあらず、知つたことにはあらざる坊主、その遊戯の運命を左右す。これを延長し來る時、そこに人生をまさしく見せらるゝ也。勞せずして巨萬巨億の富の主なる人あり、勞してなほ飽屑の如く扱はるゝ人間あり。惧るべく悲しむべきは運命の惡戯か。



坊主持

坊主持親切なのは締直し	かほる
坊主持口三味線で持ちかへる	同
坊主持すれ違ふまで持たされる	一路
坊主持あれも範圍のうちへ入れ	同
坊主持栗をこはぐ肩にする	助六
坊主持とうく驛へ出てしまひ	同
坊主持草臥てるる倉庫つゞき	突支坊
笑ひ止む頃に又逢ふ坊主持	山月

坊主持早う代つて口がすぎ
山をほめ水をほめてる坊主持
坊主持右から左へこかつぎ

馬行
光太樓
盜泉

いもぼうを出て圓山をだるう下り 一 徹

春は花いざ見にごんせ東山……で京の春は人生の春を象徴
す。老も若きも嬉々として足の踏むところを知らざる也。二
筒連れの圓満さおして知るべきのみ。平野家のいもぼう天下
に鳴る。



牙子福

京 都

血天井話に知つてをく所	舟々
見るからに紫雲の中の鹿ヶ谷	同
争へぬ推移洛外にも見えて	同
門番にしては五右衛門派出すぎる	毒仙
湯豆腐を通す鴨川時雨て來	月兔
法眼の龍は無料で見倒され	双葉子
圓山で嬉しさうながはかざらず	三笑
背廣から京の言葉をだるうきき	京郎

二合塚提けて圓山にて出合ひ

五葉

料理屋

小料理屋一軒だけの灯がのこり

二柳子

記者の眼に危険な會社斗りなり

萬よし

あゝ權花一朝の夢、一朝の夢。天下の豪商高田も茂木も脆
かりしこゝ泡沫會社と何等擇むところ無かりき。指もて押せ
ばバラ／＼と崩るゝ土塀の如き感なきあたはず。我が筆一度
その虚を衝かんか。忽ちにして將棋介しきならん。大銀行に
してなほ且つ然り記者の意氣軒昂たり。



記者

執事から記者叮嚀に斷られ	素生
愛の巢へよけいな用で記者は來る	露斗
七光りだき婦人記者思へども	霞乃
婦人記者今日は違つた柄で來る	廣賀
栽培の廣さに記者を驚かせ	助六
電話から電話で記者がさがされる	二柳子
本當にあつた事をき婦人記者	小路
蹴持てば持つで新聞記者が來る	松郎

車中談いつか御殿場過ぎてゐる
幽香
飯炊いて出たきは見ねぬ婦人記者
路郎

會社

新進の君にさ嫌な仕事なり
さゝ舟
それとなく守衛も笛の鳴るを待ち
零骨
一割の配當重役ばかり飲み
眠聲
親展書ばかりたまつて社長留守
高峰
上役を言ひ込めた晩眠られず
志貴南

かごがこれたごは俗物何をいふ 松 郎

俗物は度し難く、浅田飴は良薬にして口に甘しか。こちらで匙を投げてゐるのも知らず。

『さうだね』『そんなものかね』『まあ、さうだらう』こいゝ加減にあしらつてゐれば△△さんも近ごろは、すっかり角がこれたなごゝぬかす。なるほど冥迦につける薬はなきものなり也。



變 人

よく賣れるので變屈出してゐる

莢 豆

變骨がまたも出世を遅らせる

さゝ舟

子供だけに變屈のいふまゝになり

二柳子

變屈と言はれうぬほれ強くなり

一 洲

むづかしい人に世間がしてしまい

悟 郎

名 人

けつたいなきこへ名人一つ打ち

のほる

名人の夜更かし母が着せ掛ける

義矢満

名人さ知らず花魁惚れるなり

松郎

名人にお世辭を言ふて叱られる

刀三

立替へたこき名人は忘れて居

飯山

名人にのませる酒を買ひに出る

路郎

その罪な舞臺に妾目をそらし 無 心

溺愛できあいに乗まずるは妾めかけの常套手段じょうそうしゆたんなり。肉にくを切賣きりうり愛あいを金かねに換か算えするが故ゆゑ也。されど旦那だんなの妻子さいしをドン底生活どんせいかうに突落つるおして心こゝ地ちよしこは思おもはざるべし。

事ことに觸ふれて良心れんしん首ひを擡たげんか、錦紗美きんしゃびならず、酒苦しゆにがからん一塊いっくわの腐肉ふにくを罵ののしる勿なれ、妾めかけもまた人ひとの子こなり。



母子情

舞 臺

本雨に毒婦さいふが滑りかけ	かほる
揚幕へ日傘廻してはいるなり	同
竹籤が一本倒ける半廻し	同
この舞臺ほんとのビール飲んでる	助六
七三で殿うらゝかな春を賞め	喜花
華かな囃さなつて殺される	進一郎
新發意をそとに陣屋は幕になり	春雨
追ひかけて今度は暗い舞臺なり	聞路

妾

このまんまではご妾も慾がつき	飯山
園はれはまたも宿替かと思ひ	同
妾宅へ早や張り込みの手が廻り	零骨
今去んだ妾話の種にされ	輝翠
妾宅に育つて父を父とせず	町二
今起きた妾で妾買ひに来る	佳鳴
園はれて本家のおかず聞いて見る	かほる
資本家のくせに妾に借が出来	路郎

愛の巢を壊しに父がはる／＼來 志 郎

愛し愛さるゝ者は常に束縛を厭ふ。愛の巢の建設さるゝ所
以也。
まんだり

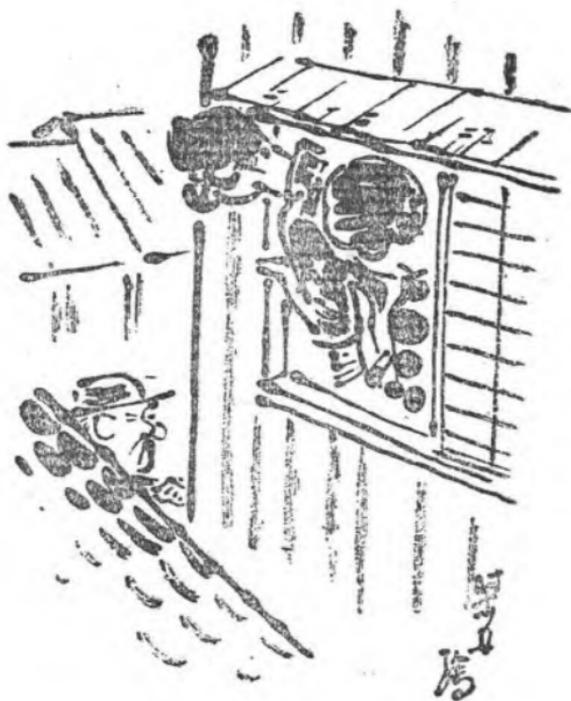
「こゝは華麗目を欺くやうな美しい宮殿だと思つておるで」

「はい、思ひました」

「それからお前、自身を其宮殿の女王だと思ひな」

「はい、ようござんすよ」

「云つた風に月日は夢の如くに流れてゆくものなり。寸善尺
魔を知らずして……………」



二階

古本を賣つて二階の暇乞ひ	路郎
二階を降りてぎこへ行く身ぞ	同
二階明け放ちて無禮講きなり	巨頭子
お二階を起して火事を見て貰ひ	藍之助
二階借米屋を連れて歸つて來	徹底郎
祝言は國ですまして二階借	十紫
帽子だけ先に二階へ上つて居	無心
二階では念佛下はすきで飲み	籬楓

若い燕

若い燕切符を買ふて渡される
路郎

若い燕へ不斷着を縫ふてる
同

若い燕死ぬ相談をされてる
同

柳行李若い燕の方が持ち
飯山

愛の巢

愛の巢へ石でも投げて見たうなり
雪洞

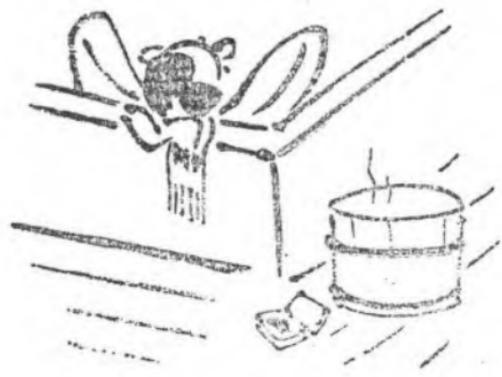
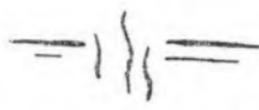
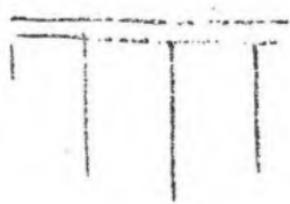
戀に生き二階に炭もおいてる
大夢子

をなご湯で宅がくくのろけやう、柴舟

ふみ耳をそばだつれば

「お前には、この白粉がいゝだらうさいふて宅が大阪で買つて来てくれました。宅はお化粧のこゝまで氣をつけてくれます」さいふ聲がする。隣の細君の例ののろけならんこは思へご静かに湯槽に沈んで更に耳を澄ませば、女湯ではなほ旺んに宅がくの連發也。いや、はや。

第
四
話



女湯

遺憾なく洗ふて浸かる女風呂

五葉

女湯へおもちやの舟も浮いてゐる

双柳子

相談をして女湯は手を叩き

竹人

女湯は捨子のやうに兒を残し

蝶二

女風呂さつきの聲でまだしやべり

徹底郎

女湯の晝ひつそりミ朱子の襟

其象

板一枚で女湯だく

郊村

女湯へ隣の喋り來てゐらし

村奉行

風 呂

浴槽にひたる山が見えぬなり

二柳子

藥風呂希望を捨てた顔が浮き

其象

朝風呂に洒落たはよいが風邪をひき

吉朗

内風呂の棚に娘のものばかり

凡平

子も親もやはり首まで湯につかり

しける

おい君きいはれて見れば帯ながし

春 三

失戀しつれんか、知らず。失意しつゐか、知らず。遅々ちぢとして歩み、茫然ぼうぜん
として立ち止まる。顔色がんしよく蒼白、瘦軀そうく憔悴、帯の悲しみ知るよ
しもなし。



帯

形見分け花見に締めた帯なるに 屏三呂

人の子の哀れおちよほの細い帯 同

せぬ帯へ母さんぐの愚痴を云ひ 零骨

寛いだ涼みに父は帯もせず 同

帯の端亭主の前でひるがへり 南枝

金儲け知らぬ女の派手な帯 春三

運向けば帯も錦紗も安いこそ 翠峰

めかす氣もなく一本の名古屋帯 葭乃

馬鹿らしき千圓の帶買ふ人よ 萩 磨
其胸へきちんごしめる帶の巾 露 斗
引つ掛けた帶明日もする帶 しける

友 達

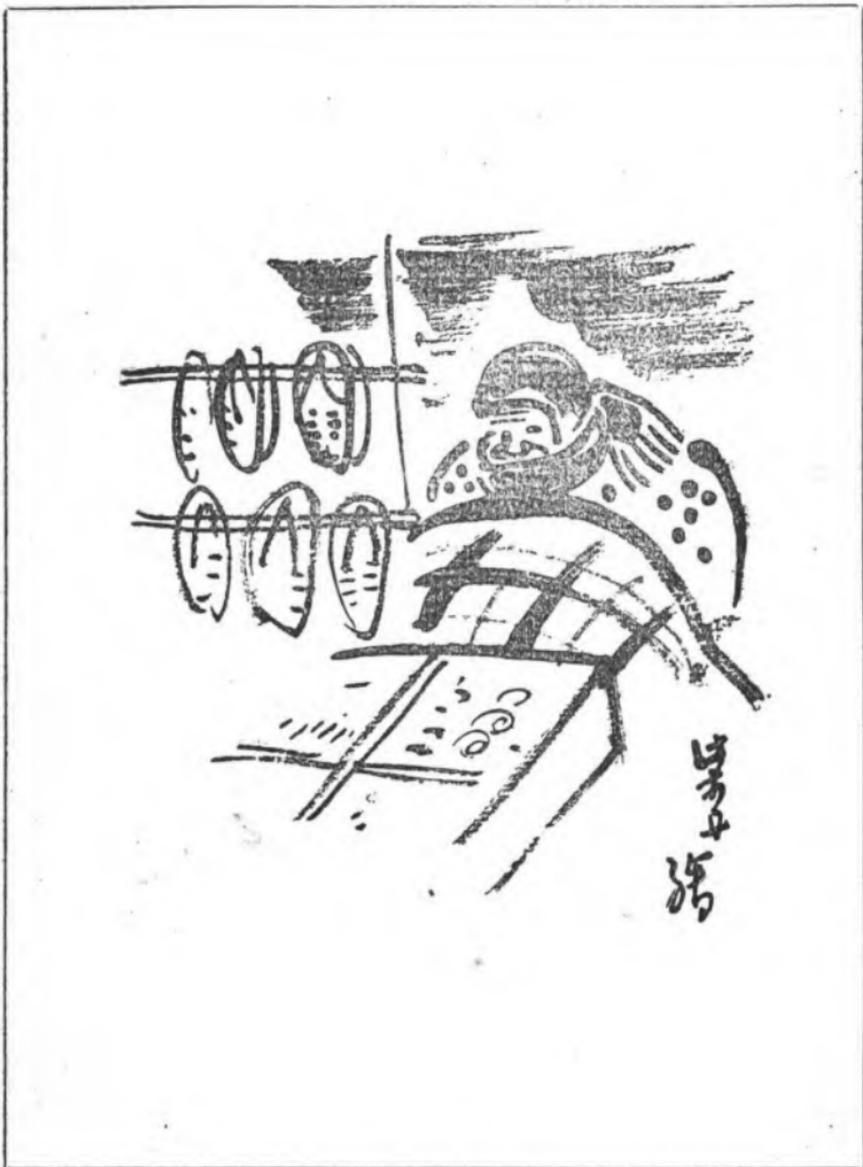
悪友がても仰山にほめてくれ 汀 柳
誘ひ人は茶漬かき込む音を聞き 柳 路
友達へ何でも食へご客にせず 隨 帖
ステッキを振つて悪友待つてゐる 三 笑
友達をみんなだまして南に居 路 郎

どうぞお取り下さいいよいよ寒い店 豆 蔓

ポスト寂しく立ち、北風ふきすさぶ。店いふも名ばかり。
草鞋寒く駄菓子寒し。たま〜顧客あれども

『どうぞお取り下さい』

こいふて更に動かんこもせず。あゝ、枯木に似たる餘生なる
かな。



店

陳列に勾配の要る壽司屋也

かほる

古本屋圓本ミ云ふ敵が出来

右大臣

お祈りの店には客のあるを知り

助六

腐らない店で主人は社に勤め

一笑

新店

新店に丁稚の坐るミここが無し

溪花坊

新店のそれもすぐ来るやうに云ひ

路郎

軒店

軒店の番何處からか戻つて來

紋太

軒店は並べ終るゝ火をおこし

岳靜

軒店の休み電燈丈け點り

素生

軒店へ昨日や今日の客でなし

路郎

店先

店先の火鉢客まで押して行き

助六

いゝ客へ店先聲が揃ふ也

吐露坊

尺持つて思案は暮し向きのこと

光路

一に一足せば二也。然り二に二を足せば四ならん。然りも
雖臺所の算盤ばかりは常に一に一足して二にならず。二に二
を足して四ならざる也。眞理の實際は往々一致せず、尺
を片手に煩悶する所以也。



物 尺

物尺を返ぬしに下りる段梯子	飯山
物尺で寄せる糸巻横にそれ	舟々
物尺で母は着たままさしてくれ	翠峯
いつさなく物尺端がこけてゐる	三笑
呉服屋のさす物尺をきつう見る	新水
物尺を無理に通して紐さなり	助六
一尺の尺のものうくほつさかれ	山雨樓
おい其「を退けさ巻尺伸ばして來	輝翠

暮らし向き

人の金ばかりやりくりして暮らし	虚空藏
息子もう生活へ批判めいた口	馬行
近所から兩替に来るいゝ暮らし	かほる
町内の祝取り換へとく暮らし	助六
引きこめて新茶を入れる暮らし向き	路郎

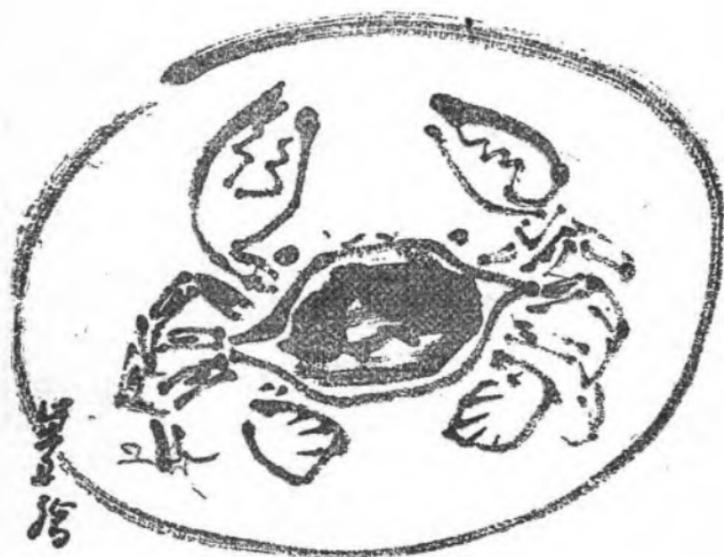
徒らな鉢なりけり蟹煮られ

町 二

蟹かにの煮にらるゝや再び海うみを見みず。極樂ごくらくか、はた地獄ぢごくか。

「徒らな鉢はちなりけり」を觀かんずるも人間にんげんのエゴイズムに外ほかならざるべし。勞働者ろうどうしゃと資本家しほんかの間まにも、かゝる悲劇ひげき常に繰返くりかへさ

る。亦また悲かなしからずや。(完)



蟹

蟹むづみ弱者の肉を挟みたり 町二

萬歳の型で汐干の蟹怒り 同

眼を疊み缺を伏せてもとの蟹 同

小蟹くお母さんの穴へ行け 蔑乃

海岸

満ち潮はこゝ迄云ふ藻を残し 昔可

海岸の松は逃げ出すすがたなり しける

數をよむやうに海岸歩くなり
別莊は波にさらはれさうにたち

光太樓
路郎

日月は輝く

【週刊朝日】

路 郎 選 評

かぞふれば光を汚す日の多し

中尾生

(評) 作者の静かな寂しい生活が偲ばれる。かをりの高い句で

ある。

うすぐらい光になれて錢の音　ゆずらん

(評) 金に執着を持ついちらしい生活が巧に描出されてゐる。

御威光ご萬事自分ではきちがひ

木作

(評) 人間の弱點をつきて機微に觸る。

戀人へたゞお大事にお大事に

義利

(評) 若き血はをされども、公然ごみこりするごこの出来ないせ

つなさが第二齣第三齣に溢れてゐる。

ふたアリの頭のよさが別れさせ

巳之助

(評)

戀は盲目でなければならぬものか、ごうかは知らぬが、末
はごうなつて、ごうなるものご、餘りに、はつきりする二
人が別々の生を營むに到るのも致し方ない事であらう。

戀文へ女優蜜柑の皮をむき

孤舟

(評)

女優にまつて、ラヴレターを貰ふ事は日常茶飯事である。
その返事を書くことさへ一つのビジネスになつてゐる。だ
からラヴレターに對して何等の感敵もないのだ。蜜柑の皮
をむいては平氣でその上にのせるところに、彼女の女達の生
活がありく描き出されてゐるではないか。

夏休み父より偉い子が戻り

雷相

(評)

線の太い句である。軽い皮肉もある。この句から文字の無い父の汗を見通してはならない。

夏休み母のしなびた乳房を見る

意紫

(評)

その乳房を見て老境に入った母をおもひ、しつかり勉強して早く母を安心させたいこいふ心がふき湧いたのである。

夏休みらしい味のある句だ。

戀人に豫期ほご逢へぬ夏休み

默念

(評)

長いはずの夏休みが瞬く間に盡きて戀人の姿が雲の峰のやうに崩れてしまふ。いかにも夏休みらしい所があつて嬉しい句である。

松の内俺と女房と十うちがひ

松 濤

(評)

平素のあはたしい生活が思はれる句である。女房の美しさはいはず、今さらのやうに歳のことをいふこそ老巧である。

松の内矯風會ものさばらず

一 徹

(評)

矯風會の老嫗たちが、年中善事？の押賣に、憂鬱を感じさせられてゐる人の叫びか。諷し得て妙。

松の内病に勝てぬ兒が淋びし

紫 樓

(評)

うちの子だけが、なぜこんなに弱いのかしら、と思へばさびしい春ではある。子を持つ親の情がよく出てゐる。

大衆と共に

【講談俱樂部】

路 郎 選 評

塵埃車あそこの角で又零ぼし

墨 水

(評) 薄ノロか。浮世の喰ひ詰め者か。のろく／＼曳いてゆく車の跡が歪みさがして見わたる。あそこの角で又こぼし」
で光景を躍如たらしめてゐる。寫生句の上乗。調子又佳し。

塵一つ無くして置けば御代參

常 夏

(評) 空は晴れてゐる。塵一つないやうに掃き清めて高貴の方の御參拜をまちまうけてゐる。そこには充分の緊張味が漲きつてゐる。こころがさうした事情か御代參である。その拍子抜けのした様があり／＼描き出されてゐる。巧みな句。

信ずるに足る店先の繩ぼこり

春 洋

(評) 世は不景氣であるといふのに、あの店先の繩ぼこりはごうだ。積みあけた荷物を一ミ眼見ただけでもその店の信用程度が知れよう。

死ぬ氣にもなれず寝てる塵芥捨場

北 廻家

(評) 生の執着は、ごみ捨て場にさへ眠りをむさほることが出来るのである。悲惨な人生の活寫である。

宣傳はほこりだらけにして通り

二九三

(評)

宣傳せんぱんもいゝが、通りすぎてあとのほこりだらけの状態けいざいを見
るさうらしいものではない。よくある圖づである。

二次會へ下戸正直について行き

曙 草

(評)

たゞ黙々もくもくとして二次會じふかいまでついてゆくところに下戸げこの正直せうじき
さがある。いよいよ尻しりをあけてからも忘れ物わすれものは無いか、眼め
を配くばらるるころに下戸げこの下戸げこらしさがある。

二次會の方は幹事がまた違ひ

井 窓

(評) 自ら買つて出た幹事か。捉へ得て妙。

二次會の自動車少し行き過ぎる

鈴

(評) 穿ちの句。一讀何んの奇もない様で、酔後の人のたび／＼

経験するところ。

二次會に喪章尊く藏われる

鳴穂堂

(評) 喪章は喪章、酒は酒であることが、この句の生命であらう。

もう飲めぬ男うしろの道で消ぬ

甘水

(評) いさゝか卑怯なところもちがしないでもないが、誰かが、

そこへ置き忘れて行つてしまつたかのやうに、さりのこさ
れたまゝ消ぬてしまふのである。輕し。

失業の父は知らで馬に乗り

散子

(評)

こきもはいつも無邪氣だ。米の生る木に離れた父だこは夢にも知らず馬乗りになつてゐるのである。イヤこきもは米の生る木さへ知らないのだ。

失業のさびしさ妻も黙つてゐ

さか繪

(評)

何が云へば夫の癩癩を大きくするだけである。賢明な彼女は慰めるに言葉もなくてたゞ黙つてゐるのである。

いけにぬの蠶に似たる自分を見

石井生

(評)

犠牲になつて失業した身が毎日々々喰べては寝、喰べては寝てゐる有様の蠶に似てゐるのを思うてはたまらなく淋しくなつて來るのを詠つたのである。

偶々にあれば力が要る仕事

仙湖

(評)

毎日欠伸ばばかりしてゐるのもやりきれない。が併し労働者として伍してはいけぬ、惨めな自分であるこゝを痛切に思はされる。

失業にたつた一人の子を案じ

飛山

(評) 失業をした夫婦にまつて、一人子の行末を案じない譯には
いかない。時代は新しくなつても子を思ふ親心には變りか
ないのである。

職もなく碁石見事な艶になり

曉郎

(評) 職業のない人生は淋しい。碁を圍んでそれを胡麻化さうま
する人生は更にさびしい。

聲のいゝ事を養母は見逃さず

節 堂

(評) 怖るべく悲しむべきは娘の前途。

形勢を非と見て聲を和らげる

太留口

(評) 何さいふ卑屈な人間であらう。現代人を罵倒し得て妙。

隠れん坊一人呼ばれて淋しがり

鳳外

(評) 花ちゃんが、お母さんに呼ばれて歸つてしまつた。あこが
急にさびしくなつた。歸つたのは花ちゃん一人だつたけれ
ど、もうつまらないから止さうよと云つてみんなちぢり
ばらくくになつて歸つて行つた。

糶賣りのもう一ト聲で客はにげ

政吉

(評) 糶賣屋の懸命な聲が青い空へ消れてゆくのが想像される。

繼母の聲に友達皆歸へし

赤短冊

(評) 繼子たごのもつ、さびしい境地せうちをよくあらはしてある。調子ていしも

よし。

掛聲かこゑごともごともに張持ちはりもち足が合あひ

南枝

(評) 同じく寫生しやせいの句、淋さびひしい感じかんじがよく出でてゐる。

からかはれ乍ら賣ツ妓酒を絶ち

拔天下

(評) やがて、あの人のものになるためには、第一に健康を思はなければならぬ。好きで呑んでる酒ではなし、いつそ絶つてしまふ、それを、あの人ならぬお客様から兎や角云はれることは迷惑でもあり、嬉しくもあるまいふところ。

禁酒して月影寒く送られる

安丁那

(評) この句、第二齣の「月影寒く」が禁酒してからのこころのさびしさをよく描き出してゐる。

犬少し酒癖を注意されて出る

薬介人

(評)

晝夜をわかつたず、寒暑の外に闘ふ彼等の生活にまつて酒な
くて何んの己れが櫻かなである事は想像に難くならう。
呑めば酔ふ。酔へば亂に入るのである。

用心をされて探偵苦笑ひ

澁面子

(評)

早くも、かんづかれたので探偵自身、自分の間抜けさ加減
を思ひ、思はず苦笑するこゝもあらう。面白し。

繼母とだけで晝餉のおごなしさ

半 雪

(評) 一讀何んの奇もない句であるが作者が人世を靜思してゐる
ところはこの句の生命がある。絶えず繼母の顔色を見てゐる
繼子の生活に同情せずにはゐられない。

仲人の脚に絡まる借袴

晴 芳

(評) 仲人はすれど、はきなれぬ袴、光景躍如たるものがある。
穿ちの句ミして面白し。

百倍の家を窮窟がる養女

八曹丸

(評)

百倍の家は誇張らしい感じがする。事實はそれ以上である

が、文字の使ひ方はさうした感じが多少の疵である。が、

養女の苦痛はたしかにうけられる。

川柳
漫畫
累卵
の遊
び

不
許
製
復

發
行
所

刷印日五廿月三年和昭
行發日一月四年三和昭
刷印日三月五年三和昭
行發日八月五年三和昭

版初
版二第

大
阪市
西成區
千本通
五丁目
七番
地

麻生路郎 編者

麻生シヨノ 發行

大
阪市
西成區
千本通
五丁目
七番
地

不

藤本卯之助 印刷者

大
阪市
東區
農人橋
二丁目
七番
地

定
價
壹
圓

朽
洞
振替口座大阪五二五八五番

